Ⅱ　遺　構

調査区は大小５つのトレンチに分かれ、全体でL字型に並ぶ。北から南東に向かって、それぞれ北区・中区・南区・南東区・東区と称する（図４）。

調査地は、北西から南東に向かう緩斜面に立地する。基本層序は、上から既存建物撤去にともなう土砂層、暗灰褐色土（旧耕作土）、茶褐色粘質砂（床土）となり、X＝－144,650以北は、床土直下に橙褐色粘質土（遺構検出面）、青灰色粘土・明橙色粘土（地山）と続き、以南は、瓦器を含む茶褐色粘質土、10世紀の遺物を含む暗灰色土、奈良時代後半の整地層である褐灰色粘質土、奈良時代前半の遺構を検出した黄灰色粘質土（整地土）、灰色砂質土（奈良時代以前の自然堆積土）となる（暗灰色土はSB960東南付近およびSD942周辺にのみ分布する）。東区は、浄化槽による撹乱土を取り除いた下の、橙褐色粘質土（奈良時代以前の自然堆積土）上面で遺構を検出した。

以下、検出した遺構を、右京一条三坊八坪の遺構、一条北大路の遺構、右京北辺三坊三坪の遺構に大別して述べる。

１　右京一条三坊八坪の遺構

検出した遺構は、概ね、奈良時代前半以前、奈良時代後半、平安時代以降の３期に時期区分される。奈良時代後半の遺構は、西大寺創建段階の食堂院に関わるものと推定される。

（１）奈良時代前半以前の遺構

南区南部および南東区・東区で検出した。いずれの遺構も、座標方位に対して北で東、東で南に振れる。奈良時代前半またはそれより前の遺構とみられるが、年代を特定する遺物は確認していない。

SB959　南区南辺と南東区で検出した桁行４間以上、梁行２間の掘立柱の南北棟建物。南妻柱が確認されないことより、建物はさらに南に続くと考えられる。柱間は、桁行約2.4m（８尺）、梁行約2.7m（９尺）。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺は約90㎝。柱はすべて抜き取られている。

SX961・962　南区中央で検出した掘立柱列。SX961は東西方向の柱列で、柱穴４基を検出した。SX962は南北方向の柱列で、SX961東端の柱穴より北へ１間分を検出した。両者とも柱間は約2.1m（７尺）。柱穴は隅丸方形もしくは円形で、直径は約90㎝。両者合わせて東西棟建物の南東隅部分となる可能性もある。

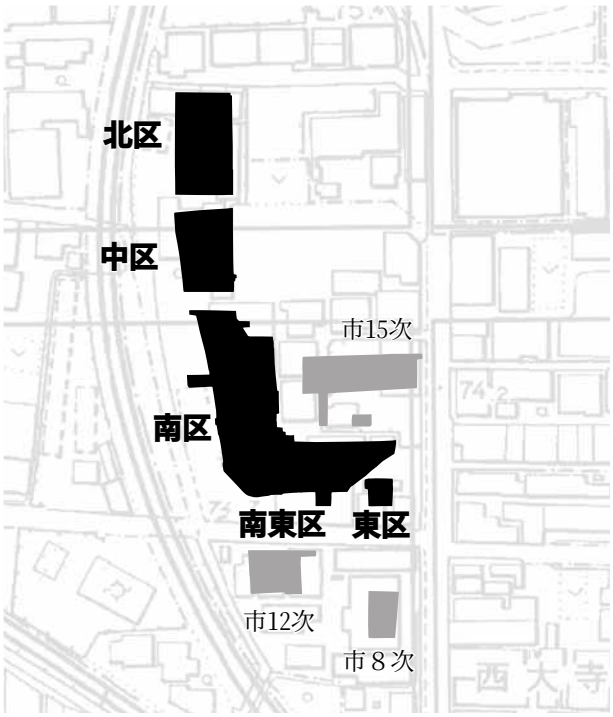

図４　調査区の名称と位置

SD963　SX961の約3.3m南を並行する東西溝。幅約1.1m、深さ約20㎝。西は調査区の外に続く。

SB953　桁行１間以上、梁行１間の掘立柱の南北棟建物。北は調査区の外に続く。柱間は梁行約2.4m（８尺）、桁行約1.8m（６尺）。柱穴の２基は礎盤石や根石を残す。柱穴の平面はほぼ円形を呈し、直径は1.0～1.2m。北柱筋はSX961と、東柱筋はSB959の西柱筋とそろえる。

SX990　東区西辺で検出した南北掘立柱列。柱穴２基（１間分）を検出した。柱間は約2.4m（８尺）。柱穴は隅丸方形で一辺は約80㎝。北側の柱穴はSB959の北妻柱筋の延長上に位置する。

（２）奈良時代後半（西大寺創建段階）の遺構

SB955　南区西南隅で検出した礎石建ちの東西棟建物。桁行３間分、梁行１間分、礎石の据付穴６基を確認した。建物の北東部分とみられ、柱間は桁行梁行ともに約3.0m（10尺）。全体の規模は、SB960（次項）より推定される中軸で折り返すと桁行方向は約30m（100尺）となり、柱間寸法より梁行方向は約12m（40尺）に復元される。この寸法は「資財帳」にみえる「殿」に等しい。

柱穴は方形で、一辺は約2.1m。東妻柱筋の柱穴のみ、東西方向の一辺が約1.5mと小さい。上面の削平が著しく、柱穴の深さは最大でも約30㎝を残す程度であるが、礎石の根石と思われる丸石が残る柱穴があることから、礎石建ちの建物と考えられる。

SB960・SD971・SD972　SB960は、南区北半で検出した礎石建ちの東西棟建物。基壇土、基壇南北縁、礎石の据付・抜取穴22基を確認した。桁行５間、梁行２間の身舎の四面に庇が付く、桁行７間、梁行４間の建物と考えられる（図５）。全体は桁行方向約27m（90尺）、梁行方向約15m（50尺）と推定され、「資財帳」の「大炊殿」に比定される。

基壇土は掘り込み地業を施さず、地山上に直接積む。残存する積土は約30㎝。明瞭な版築は認められない。基壇南縁部には東西溝SD971が、基壇北縁部東半には東西溝SD972が通る。基壇外装抜取溝もしくは雨落溝を踏襲して掘られた溝か。SD972は、基壇中軸付近までは伸びない。北面階段の位置と関係する可能性もあるが、北面階段そのものは確認できなかった。南面階段の痕跡も未確認。基壇規模は、東西約30m（柱位置からの推定）、南北約18m。なお、基壇東縁部の位置は、隣地境界の現水路に踏襲されている可能性が高い。

表１　SB960礎石据付穴寸法および地業

番付	寸法（㎝）		埋土の状況	瓦の状況
	東西	南北		
ロ１	150	130	○	×
ロ２	180	180	△	○
ロ３	165	―	○	○
ロ４	160	140	△	○
ロ５	150	130	×	△
ハ１	150	150	○	○
ハ２	150	200	×	○
ハ４	150	―	○	×
ハ５	150	160	△	△
ニ１	180	180	×	○
ニ２	210	180	△	×
ニ４	180	180	△	×
ニ５	200（推定）	180	△	×
ホ１	150	150	×	○
ホ２	150	150	△	○
ホ４	150	150	△	×
ホ５	150	160	×	○
へ５	―	150	×	○

（表１凡例）

埋土の状況
- ○：埋土が厚さ５～10㎝程度の層状を呈する
- △：埋土が厚さ５～10㎝程度の層状を呈する部分とそれ以外からなるか、または10㎝～15㎝程度の層状を呈する
- ×：埋土が層状を呈さない

瓦の状況
- ○：瓦が面的に敷き込まれる
- △：埋土中に瓦を含むが面的にならない
- ×：埋土中に瓦を含まない

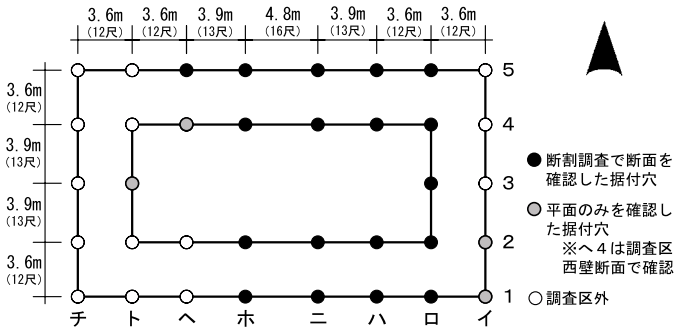

図５　SB960の番付および柱間寸法

図６　SB960礎石据付穴（ハ１）壺掘り地業

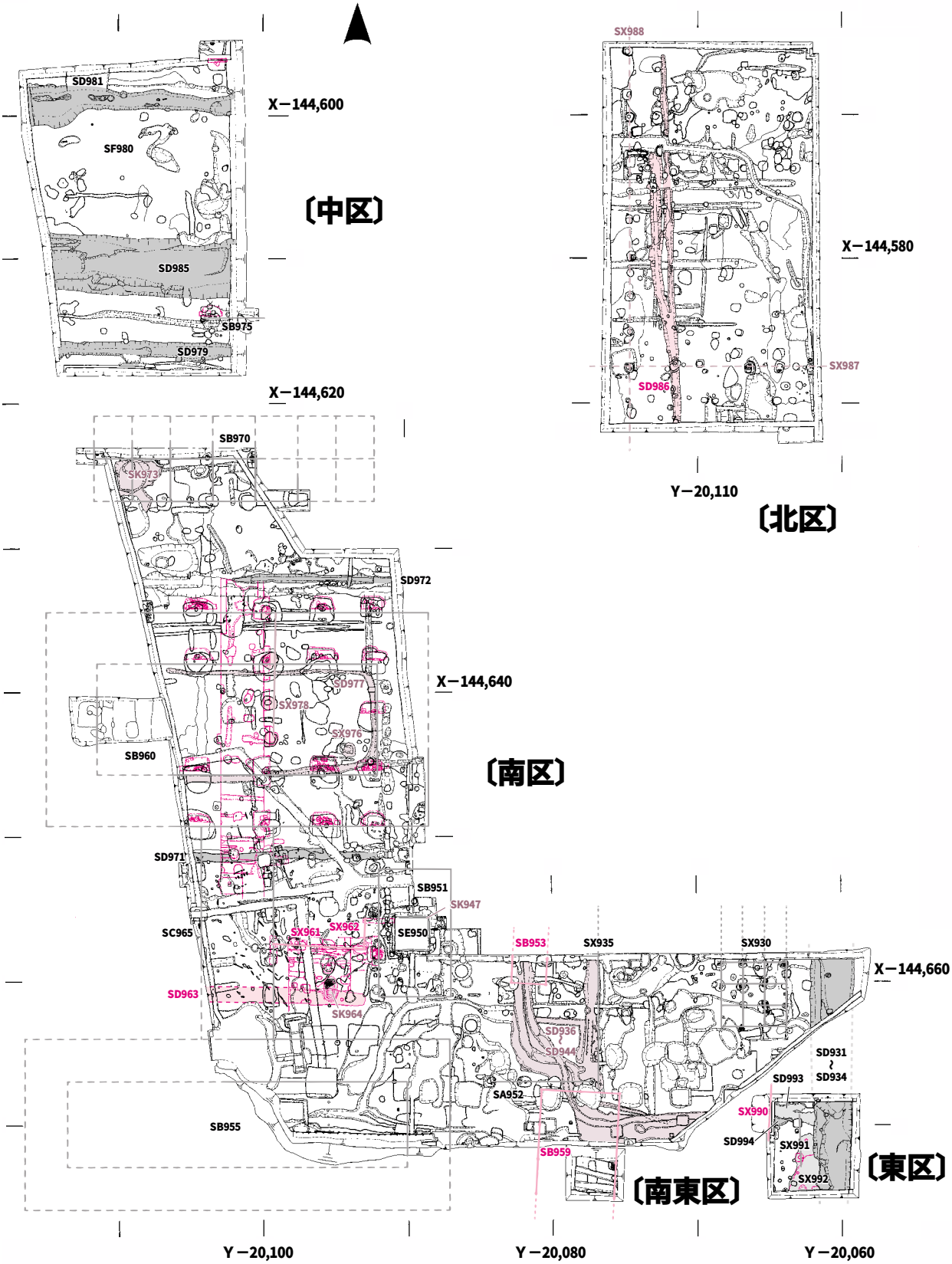

図７　遺構平面図　1:400

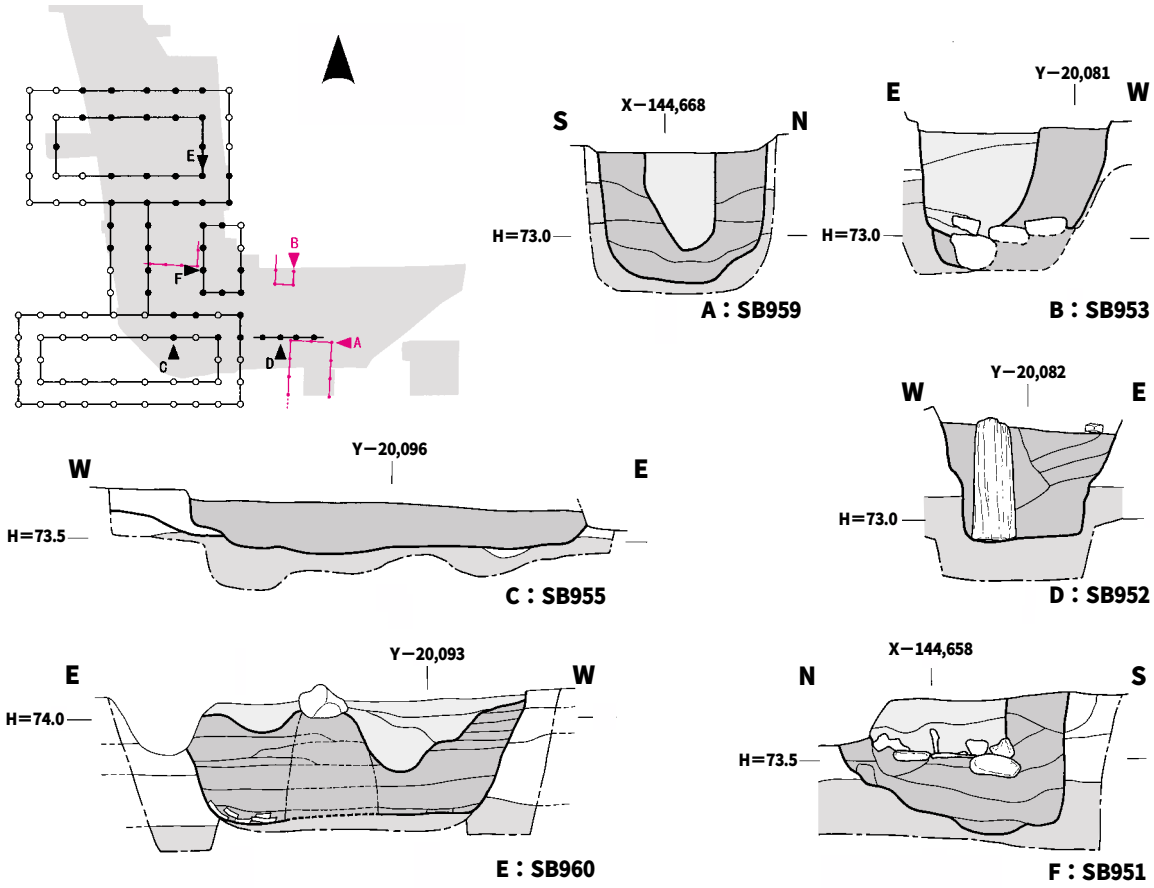

図８　各遺構柱穴断面図　1:40

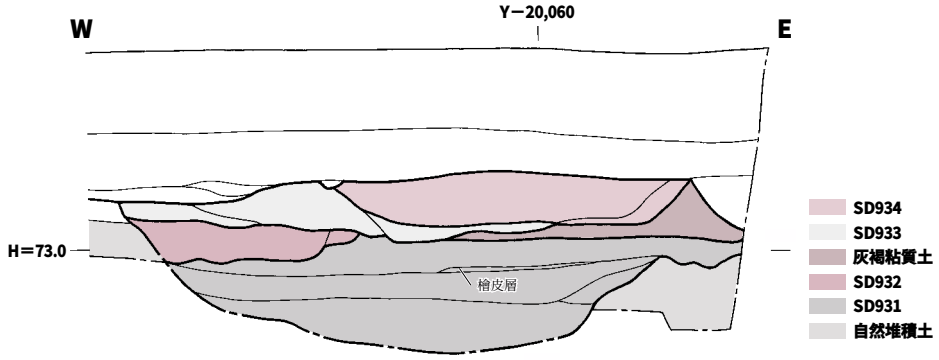

図９　SD931～934　断面図（X＝－144,668）　1:40

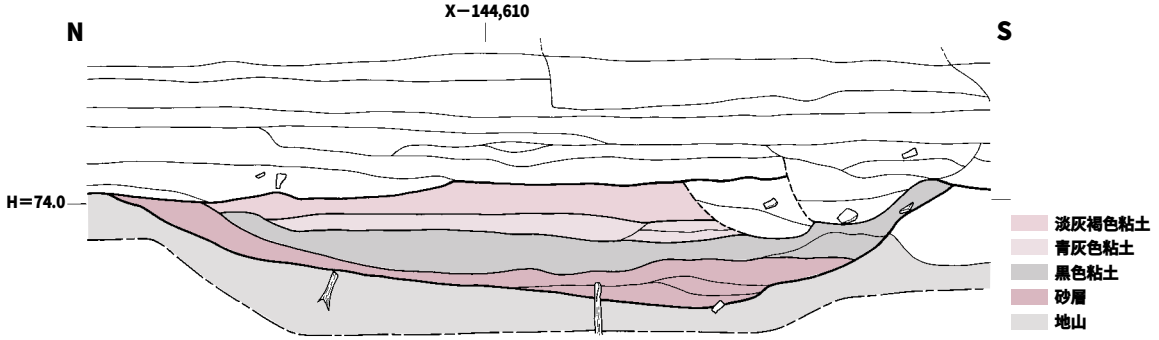

図10　SD985　断面図（Y＝－20,102）　1:40

礎石据付穴は壺掘り地業を施す。据付穴は、一辺1.5～２mの隅丸方形で、遺構検出面からの深さは0.5～0.7m。埋土は、精粗の差はあるがいずれも突き固め、層状を呈するものもある。据付穴の一部には瓦を面的に敷き込むものもある。敷き込む瓦は、いずれも奈良時代のものであった。また、地業の中心部分には、人頭大の石を埋め込む。据付穴の底面が73.4mでほぼそろう点や、中央に石を入れるなど、一定の共通性が認められる一方、瓦の敷き込み具合や、土の積み方などは据付穴ごとに異なる（表１）。なお、こうした工法は西隆寺回廊でも確認されている（奈文研2001『奈良文化財研究所紀要2001』）。

礎石はいずれも抜き取られ、根石も原位置をとどめるものはない。礎石抜取穴から出土する遺物は、９世紀半ば以前のものである。SD972・SK973（後述）出土の遺物も同様であることから、SB960は９世紀の半ば頃までには廃絶した可能性が高い。

なお、下層遺構確認のため、SB960中央付近の南北21m、東西３mの範囲で基壇土を掘り下げたが、顕著な遺構は確認できなかった。また、据付・抜取穴の断割調査でも下層遺構は確認されなかった。

SC965　SB955とSB960の中央間をつなぐ南北方向の軒廊。桁行３間、梁行１間の礎石建ちで、柱間は桁行約３m（10尺）、梁行約5.1m（17尺）。SB951（後述）と規模が等しく、柱筋をそろえる。

SB970　SB960の北で検出した掘立柱の東西棟建物。桁行５間分、梁行１間分、柱穴10基を確認した。北および東は調査区の外に続くとみられる。

柱穴は一辺約１mの不整形な方形で、深さは約60㎝。一部の柱穴には直径約30㎝の柱根が残存するが、礎盤などの根固めは認められない。遺物は奈良時代の土師器が主体で（掘形・抜取穴とも）、製塩土器を含む。

建物位置から「資財帳」の「甲双倉」南西部分と推定されるが、いくつかの問題点が残る（51頁参照）。

SB975　中区南部で掘立柱の柱穴（２基）を確認。柱間は約2.7m（９尺）。食堂院の北を限る築地に開く穴門とみられる。柱穴は一辺約1.2mの方形で、遺構検出面からの深さは約80㎝。柱は抜き取られる。

西側の柱穴では、掘形底部中央付近に丸太を半裁した木片を置き、土を積む。底部から40㎝程度積んだ上に凝灰岩（一辺約40㎝の方形で厚さ約10㎝）を据える。抜取痕跡は、この凝灰岩の両端から上方に認められることから、この凝灰岩を礎盤とし、柱を建てたとみられる。凝灰岩礎盤は掘形の西側に偏る。西側の柱穴の掘形からは奈良時代の土器が、抜取穴からは９世紀半ばから10世紀前半にかけての土器が出土した。

図11　北門SB975礎盤石検出状況（北西から）

SD979　築地本体の痕跡は確認できなかったが、SB975の南で東西溝SD979を確認した。SD979は、SB975の前面で幅が狭くなり、西大寺食堂院北面築地の南雨落溝と考えられる。なお、北面築地の北雨落溝は、一条北大路南側溝SD985（後述）が兼ねていたのであろう。

SE950　南区中央で検出した井籠組の井戸。井戸の平面は方形で、内法は一辺約2.3m。遺構検出面からの深さは約2.8m。井戸枠は横板材５段分（高さ約2.3m）が残存し、上部構造は抜き取られていたが、井戸の内部から井戸枠とみられる木材が出土しており、最低６段以上存在したとみられる。井戸底に、浄水用として直径３㎝前後の円礫を敷き詰め、その上に木炭を敷く（図12）。

掘形は東西に長い楕円形で、大きさは南北約5.4m、東西約6.6mである。井戸本体は掘形の西寄

りに設置されており、底部は井戸枠がおさまるほどの幅しかない。掘形の埋土は粘質土で、最上部は黄色土を層状に固め、丁寧に埋められている。また、黄色土上面には凝灰岩が残存し、他にも石の抜取痕跡とみられる穴を確認していることから、井戸の周囲には石が据えられていた可能性がある。

井戸内の遺物は、上からaからeまでの５層に分けて取り上げた。e層は灰色の粘質土で、瓦を含むが比較的遺物が少ない。d層は多量の遺物を含み、木屑層と共に互層をなす。木簡の大半はこの層から出土した。ｃ、ｂ、a層と、徐々に埋土のしまりが良くなり、木質遺物の量が減り、土器の割合が増える。以上より、井戸は、廃絶後食堂院で不要となったゴミを投棄することで、上部まで埋まったとみられる。なお、a層の上面には焼けた痕跡が認められた。また、e層の上面に井戸枠とみられる部材が落ち込んでいることから、不要物の投棄が本格的に始まる頃には上部の井戸枠は抜き取られていたと考えられる。投棄の開始から終了までの期間は、ｂからｄ層で珪藻類が検出されているため、数週間程度要したとみられる（44頁参照）。埋土の遺物は奈良時代末を下限し、井戸は木簡の最新の年紀である延暦11年（792）からほどなく、８世紀末に廃絶したと考えられる。

SB951　SE950の周囲で掘立柱の柱穴８基を検出した。SE950の覆屋と考えられる。桁行３間、梁行２間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行約３ｍ（10尺）、梁行約2.6m（8.5尺）。SC965の梁行方向と柱筋をそろえ、全体の規模も等しい。また、東柱筋はSB955の東妻柱筋にそろえる。柱穴の一部には、礎盤を残すものや、礎盤の下をさらに根石によって根固めしたものもある。SE950の掘形との重複関係より、井戸を設置した後に建てられたことがわかる。

SX930　調査区東端で検出した埋甕列。各埋甕間は約1.5m（５尺）で、東西４基の列を、南北方向に４列検出した。埋甕は据付痕跡のみが残るものを含めて合計12基を確認したが、他４基は、撹乱により確認できなかった。市15次調査でも同様の遺構を検出しており、今回検出した埋甕列は、その南延長部分であろう。未発掘部分にも遺構が連続していたとすると、埋甕列は市15次調査と合わせて南北約28.5mとなり、甕は少なくとも20列、総数80基が並んでいたと推定される。

甕はほとんど原形をとどめておらず、底部のみが残存する。残存する掘形の直径は最大で80㎝。甕の下には、水平に据えるために２～３㎝大の小石や埴輪片をかませる。残存する甕の体部外面には、埋設を示すよ

図12　井戸SE950完掘状況（東から）
底部に円礫と木炭が敷かれる

図13　SX930埋甕検出状況
（北西から）

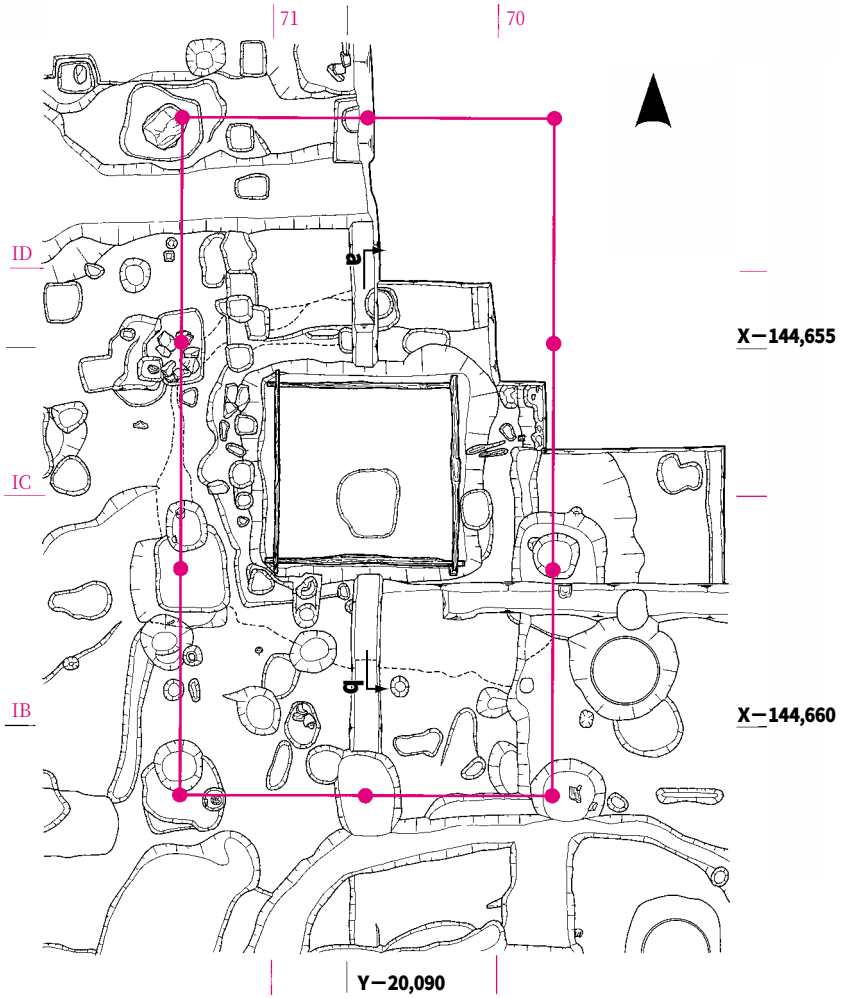

図14　SE950・SB951　遺構平面図　1:100

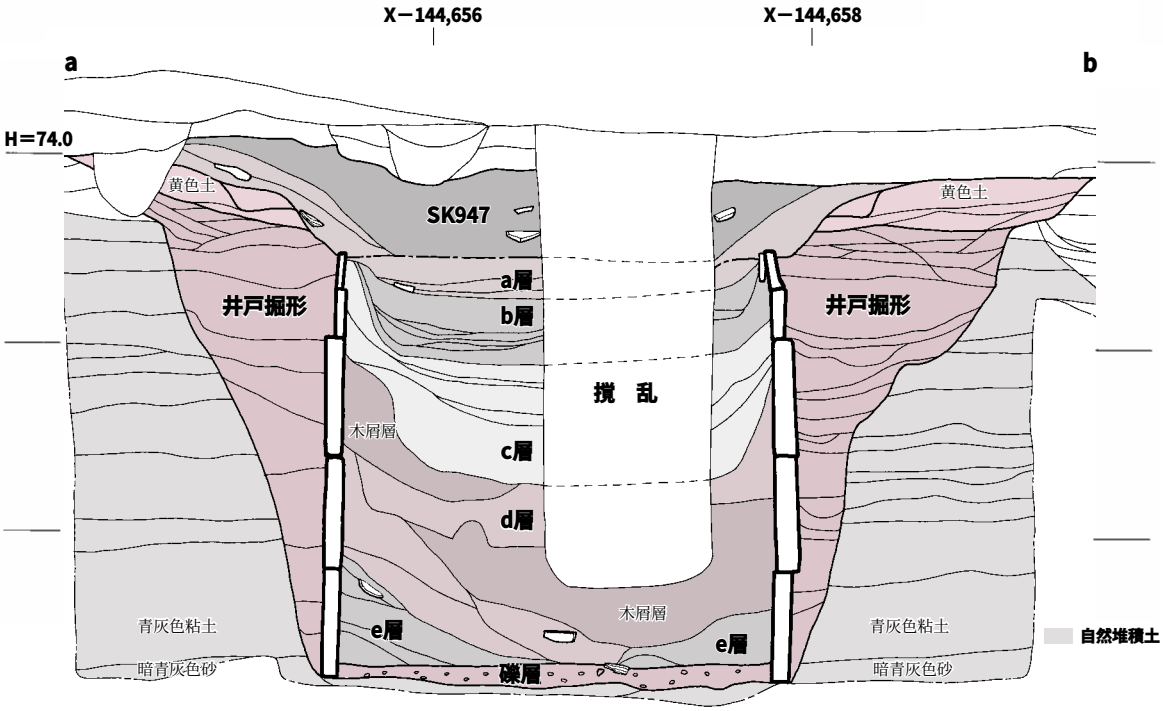

図15　SE950　断面図　1:40

うな変色などは確認できなかった。甕の内部からは、10世紀頃の土器が底部に貼り付いた状態で出土した。甕の最終的廃絶時期を示すものとして注目される。

なお、X＝－144,665より南では、埋甕もしくは甕の断片などは確認されなかった。

SX935　SX930から約８m西で検出した、南北方向に断片的に並ぶ凝灰岩列(図16)。凝灰岩は風化が進んでいる。据え付けた形跡があるが、配列に乱れがみられることから、SD941（後述）の影響で原位置をとどめていないものと思われる。なお、X＝－144,668より南では凝灰岩片が包含層においても確認されないため、南限はこの付近であろう。また、この凝灰岩列より東は遺構面が若干高く、基壇状に整地された部分の西側外装とも考えられる。

図16　凝灰岩列SX935（南から）

SA952　SB955の身舎北柱筋より東にのびる掘立柱塀。柱穴４基分を検出した。柱間は、東２間が約2.5m（8.5尺）、西１間が約2.1m（７尺）。東から１・３基目の穴には柱根が残存する。柱根の径は約20㎝。最も西の柱穴は、瓦や拳大の丸石を敷いた上に凝灰岩の礎盤石を据えている。柱間や、柱穴の様相の違いより、西の１基は別の遺構の可能性を残すが、他の３基と共にSB955の柱筋とそろうことから、一連の遺構と解釈した。

SD931～934・SX992　南区および東区の東辺で検出した南北溝。途中未発掘部分を含め南北約17m分を検出し、調査区外の南北へ続く。市15次調査で検出された南北溝の南延長部分にあたる。

SD931は、調査区の東辺を通る南北溝。溝幅は約３m、深さは最大で60㎝が残存する。埋土は灰色粘質土で、埋土中に檜皮、瓦を多量に含む。SD932は、SD931の上面を灰褐色粘質土によって一旦整地した後、溝心を約１m西に移して掘削した南北溝で、溝幅約1.2m、深さ約25㎝、埋土は灰色砂混茶褐色粘質土。その後さらに溝心を約30㎝東に移動し、SD933を造り、最後にSD934を造る。SD933は幅2.6m、深さ約40㎝、埋土は灰茶色砂質土。SD934は最大で幅2.5m、深さ約30㎝が残存し、埋土は暗灰色砂質土で、土器・瓦片を多く含む。SX992はSD931に先行する溝のあふれ状遺構で、南で西に広がる。

なお、SD931と、SX930を検出した遺構面との関係は撹乱のため不詳。これらの南北溝は、SX935を西辺とする基壇状の部分の東辺に対応する溝か、あるいは食堂院東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したものであろう。いずれも埋土中に凝灰岩片は含まれていない。

SD993・994　東区で検出した東西溝。SD993はSD931に先行する。埋土は灰色砂質土で、調査区の東壁でも延長部分を確認した。底部数㎝が残存していた程度で、後述の南区南辺を流れる東西溝群（SD938・940・943・944)との関係は不詳。SD994はSD993と重複し、SD993より新しい。撹乱により大部分が壊されている。

SX991　東区で検出した南北方向の掘立柱列。柱穴２基を検出した。柱間は約2.4m（８尺)。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺は約65㎝。南側の柱穴は、SX992を取り除いた下で検出した。SD994より新しい。

（３）平安時代以降の遺構

SD936～944　南区東南部で、幾重にも重複する溝を検出した。SD936は幅50㎝で、東に流れた後、直角に折れ南流する。SD937はSD941と重複する幅50㎝の南北溝。SD941より古く、SD936とは重複関係にない。SD938・939はSB953の上面から南区東南隅へ蛇行する溝。重複関係よりSD939がSD938より新しい。SD939は埋土の状況よりSD940に連続する可能性もある。SD940は幅30㎝の東西溝で、東は調査区の外に続く。SD938

と重複し、SD938より新しい。SD941はSX935の西側を流れる南北溝。幅は約1.1m。南にいくにつれ、西肩が判然としなくなる。SD939より新しい。SD942はSD938・939の上部を流れる蛇行溝。SD939があふれた痕跡の可能性もある。SD943は南端の東西溝。幅は約２m以上で、SD938と北岸を同じくし、南岸は調査区外とみられる。東も調査区の外に続くが、東区では撹乱により検出できなかった。SD939・SD940より新しい。SD944は調査区東南隅で長さ３m分を検出した。埋土には瓦器を含む。SD943より新しい。

これらの溝は、以上のような重複関係が見られるが、基本的には改修の工程順序を示しており、各遺構間は大きな時期差はなかったものと考えられる。SD942や、東区・南東区一帯に広がる砂層の存在から、おそらく大雨などで氾濫した食堂院内の水を効率よく外に排水するために掘られたものであろう。なお、重複関係でもっとも古いSD936の埋土から、９世紀中頃の土器が出土した。

SK973　南区西北隅で確認した土坑。埋土は上層と下層に分かれる。上層では不整形で、東西約３m以上、南北約2.5m以上の溜まり状を呈し、下層では一辺約２mのほぼ方形。検出面からの深さは最大で約40㎝。SB970と重複し、SK973の方が新しい。埋土から大量の瓦が出土した。瓦はいずれも奈良時代で、上層に９世紀に降る土器を含む。SB960やSB970などの廃絶にともなう廃棄土坑か。

SX976・SD977　SB960基壇上の身舎東南で、東西約1.2m、南北約１mの赤白色を呈する焼土面を確認した。鍛錬鍛冶炉の底部と考えられる。２回の造り替えがあり、最新のものは直径70㎝、残存深さ10㎝の円形炉。SB960廃絶後に造られたものであろう。また、SD977はSX976にともなう周溝の可能性が高い。

SX978　SB960中央間東の柱に筋をそろえた南北方向の掘立柱列。柱穴を４基確認した。北端はSB960北側柱とほぼ重なる。柱間は約2.7m（９尺）。柱穴は一辺約１mの隅丸方形で、遺構検出面からの深さは最大で約50㎝。SB960廃絶後の遺構である。

SK964　SD963を掘り込む土坑。南北に長い楕円形平面を呈し、長径約1.6m、短径約１m。埋土より多量の檜皮と奈良時代後半の瓦が出土した。SB955やSB960の廃絶にともなう廃棄土坑で、SK973と同性格の遺構か。

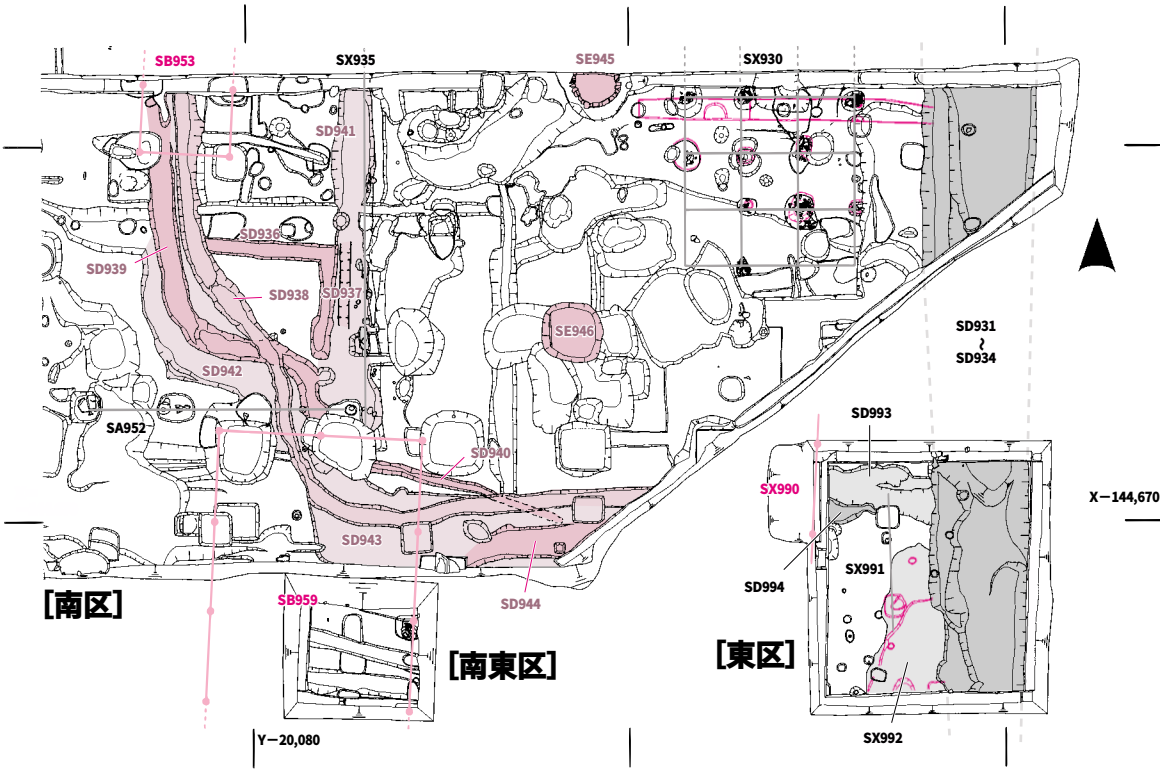

図17　南区東部・南東区・東区　遺構平面図　1:200

SK947　SE950上面で検出した、南北2.3m、東西2.4mの方形の土坑。埋土からは多量の炭と９世紀後半から10世紀半ばまでの土器が出土した。SB960東南付近やSD942周辺に分布する暗灰色土に含まれる遺物と同時期で、10世紀半ばに大風で食堂が倒壊した後に、周辺一帯を整理した際の遺構であろうか。

SE945　南区東部で検出した、内法径1.1mの円形の瓦積み井戸。井戸の深さは検出面より1.4mで、井戸枠は深さ1.1mが残存する。井戸底には浄水用に拳大の礫を敷く。井戸枠は主に平瓦を用い、一部軒平瓦（中世）も使用する。掘形の埋土は粘質土で、井戸枠を固定する。井戸内の埋土から13世紀頃の羽釜が出土した。

SE946　SE945の南で検出した円形の素掘り井戸。直径は1.6m。調査中に崩落し、深さは未確認。埋土から、直径10㎝程度の自然木や中世の瓦器が出土した。

図18　SE945検出状況（南西から）

2　一条北大路の遺構

SF980・SD985　中区中央付近で、一条北大路南側溝とみられる東西溝（SD985）を検出した。溝幅は3.5～４m、遺構検出面からの深さは約0.7m。側溝心の座標はおよそX＝－144,610.5。少なくとも３回以上の浚渫・改修がおこなわれたようである。西から東に流れ、溝底付近に砂が堆積しており、比較的多量の水流があったとみられる。埋土から瓦が出土したが、土器は確認できていない。出土した瓦はいずれも奈良時代後半のもので、埋土間での時期差は認められない。また、平安時代に降る遺物も確認されていない。

北側溝は、今回の調査区内では確認されておらず、北区・中区の間の現水路直下に存在する可能性が高い。その場合、一条北大路（SF980）の側溝心々間距離は約16m（54尺・45大尺）と推定される。

SD981　中区北端で検出した東西溝。幅１～1.5m、残存する深さ約30㎝。調査区東端付近で南に広がり、南流した痕跡も認められた。出土遺物は奈良時代後半のものを中心とする。なお、SD981がある時期の一条北大路北側溝である可能性も残る。

3　北辺三坊三坪の遺構

北辺三坊三坪は、奈良時代のまとまった遺構は少なく、空閑地もしくは広場の状況を呈していた可能性もある。中世以降とみられる多くの小穴を検出したが、建物としてはまとまらない。

SD986　北区西部で確認した南北溝。ほぼ同じ場所で付け替えられている。幅・深さは一定でないが、幅は概ね約30㎝、遺構検出面からの深さは約10㎝。埋土の様相から、２条とも短期間に埋め立てられたと考えられる。埋土から、奈良時代前半から中頃にかけての土器・瓦が多量に出土した。

SX987　北区南部で検出した東西方向の掘立柱列。柱穴は一辺60～80㎝の隅丸方形を呈し、深さは約30㎝。柱の間隔が一定でなく、場所により異なる（1.7～3.4m）。南北溝SD986と重複し、SX987が新しい。SX988の南から２基目の柱穴と柱筋をそろえる。

SX988　北区西部で検出した南北方向の掘立柱列。柱穴11基を確認した。柱穴は隅丸方形で、一辺60～80㎝。南の４基は柱間約2.6mで、遺構検出面からの深さは約50㎝でそろう。以北の柱穴は、柱間にややばらつきがあり（２～2.7m）、深さも異なる。柱穴の掘形から、10世紀の黒色土器が出土した。